
「なんか知らんが勇者に選ばれた」

けちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「なんか知らんが勇者に選ばれた」

【Nコード】

N7715Y

【作者名】

けちゃ

【あらすじ】

テキスト勇者と仲間の怠慢冒険！

ボケありツッコミありメタありバトルあり(?)ラブコメあり(?)

残念系ほのぼの冒険コメディファンタジーストーリー！

「旅にできるならお金だよね」(前書き)

はじめまして、けちゃといたします。初投稿なので拙い部分もあるかと思いますが、よろしくお願いします。

「旅にできるならお金だよね」

静かで清々しい昼下がり。

「いやー、堂々と民家漁るのはいいもんだねえ。お、旅人の服発見」
タンスを開きながら俺が言うと、

「勇者さん……あんまりそういうこというもんじゃないですよ……」

と、僧侶ちゃんに怒られた。いやあ、怒ってても可愛いなあ僧侶ちゃん。

「ま、貰えるものは貰っておいたほうがいいんじゃない？貢ぎ物だと思って。」

などと地味に腹黒いことを言うのは賢者。おねーさんキャラだが驚くほどつるぺた「消すわよ？」「ごめんなさい何も言ってますん。

「にしてもお前ら面倒なことしてるなー。タンスごと持ってけばいいじゃないか」

……。このガチムチマッチョは戦士。アホ。キング・オブ・アフオ。A・F・O。

・・・いきなり俺が勇者だと告げられ、王様に100Gと銅の剣を貰って旅立ってはや数ヶ月。
勇者の動き（強奪）も様になってきた。
しかしこれから世界救いに行くってヤツに100G + 安物の剣って・・・俺達の国そんなに財政難だったのか・・・。

今は俺達の住んでいた城下町から北東の、小さな村にいる。

「それにしても静かでいい村ですね。自然も綺麗ですし・・・。」
僧侶ちゃんがそんなことを言うと戦士は、

「そうかあ？何もない村だし、早く洞窟の魔物片付けちまおうぜ！」

とか言い出した。この脳筋には自然を楽しむ感性はなかったらしい。

とはいえこの村が魔物に困らされているというのは聞いているので、

「取り敢えず今日はもう日がくれるし、洞窟は明日にしないか？」

とみんなに聞くと、

「いいんじゃない？夜出歩くのは危険だしね。」

と賢者。

「じゃあもう飯が食えるんだな？ヒヤッホウ！」

・・・なんで俺コイツ仲間にしたんだっけ・・・

「旅にできるならお金だね」(後書き)

まだまだ始まったばかりですが、意見要望質問アドバイス等あると嬉しいです！

「裏目に出るじつってあるよね」

翌日、俺達は村の近くの森の奥にある洞窟に向かった……のだが。

「迷った……」

森は薄暗く、目印もないのですぐに迷ってしまった。

「しかし勇者が道に迷うなんて珍しいなー！リンゴも木から落ちるってやつか？」

……戦士のアホが何か言ってるので、ツッコんだら負けかと思いつつも、

「お前はアレか、万有引力でも発見したのかニュートン戦士」

と、きちんとツッコんでやる。

「それを言うならサルですよ戦士さん……」

俺の態度とは逆に、優しく教えてあげる僧侶ちゃん。マジ天使。

「なにはともあれ、早く進まないとまずいんじゃないかしら？」

賢者が話を進めてくれる。確かに出てくる敵は雑魚とはいえ、このままでは消耗してしまふ。

「じゃあ、どっちに進む？僧侶ちゃん。」

まずは進まないと呼があかないので、俺はひとまず僧侶ちゃんに聞いてみる。

「え？じゃあ東に……」

「西か」

「西だな！」

「西ね」

「ええええええ！ひどいです皆さん！何で聞いたんですか！」

僧侶ちゃんの勘が驚くほど当たらないのはここまでの短い旅で嫌というほど思い知った。

「ぐすん……皆さんが私のことイジメます……」

「ま、方向は決まったし進みましょうか。」

拗ねてる僧侶ちゃんを華麗にスルーして賢者が歩き出したので、俺と戦士も後に続く。

「ふええ……おいてかないで下さいいいいいい……」

僧侶ちゃんの指すほうと真逆に歩き続けると、洞窟の入り口が見えてきた。

「ここまで完璧に当たらないなんて……流石の俺も目からゴボウだぜ……」

「ずいぶん斬新な目をしてるんだなお前は」

僧侶ちゃんが落ち込んでいるのでそれを言うならウロコだと正してやる人もいない。

「戦士の中ではことわざがマイブームなのかしらね・・・」

賢者はそう言うが、そうだとしたら迷惑この上ない。ツッコむ方の身にもなってくれよ。

まあそれはおいといて、

「さて、気を取り直してダンジョン攻略といきますか！」

「涙目上目遣いは反則だろっ」

「暗いな・・・」

洞窟に入ると、日の光はすぐ届かなくなった。最近までは炭鉱だったらしいのでところどころに松明があつて先には進めるが、かなり薄暗い。

「か、かなり暗いわね・・・」

賢者はそういつて俺の服の裾をキュツとつまんでくる。あれ、こいつもしかして・・・

「暗いトコ怖いのか？」

「ばっ、そ、そんなわけないじゃない！はぐれると大変だと思っただけよ！」

そういうので賢者の手を離し、サツと離れてみると、

サツ。

ピタッ。

サツ。

ピタッ。

賢者はしつかりくつついてくる。更にからかおつと思つたが、賢者が涙目で見上げてくるのでやめた。賢者にも苦手な物があつたとはな・・・

「二人とも、何遊んでんだ？」

戦士が聞いてきたのでなんでもないと答えておく。

「それにしても何か出そうですね・・・」

と、僧侶ちゃんが言う。どうやら僧侶ちゃんも多少怖いらしい。

「や、やめてちょうだい僧侶ちゃん・・・」

だが賢者の方が重傷のようだ。このままでは女子勢が使い物にならないので俺は、

「大丈夫大丈夫、最初のダンジョンなんてどのRPGでもお試してみたいなもんだし、何も出ないよ。」

と言ってやる。

「RPG？なんだそりゃ？」

俺のメタ発言に首をかしげる戦士。

「そ、そうよね、最初のダンジョンなんてトワの森みたいなもんだよねー！」

いや、トキの森は最初にしては結構むずかったような・・・

まあ効果はあったようなので敵を蹴散らしつつ進むと、光が漏れ出る部屋のようなものがあった。

「ここか・・・」

俺は部屋のドアの隙間から中を伺う。するとそこには???.?!

「賢者さんマジばねえっす」

(な、なんかカン タミたいのいるー！ー！)

中を覗いた俺は、中にいたヤツに驚愕する。

なんだあの覆面上半身裸男・・・モロにカンダ じゃねえか・・・
みんなカ ダタわかるかな、ドラ エ3の。まあわからん人はグゲ
つてくれ、見た目が一発でわかる。

なにはともあれ、俺は呼吸を整えてみんなのところに戻る。

「ど、どうでした？」

と、僧侶ちゃんが聞いてきたので俺は答える。

「あ、ありのまま見たことを話すぜ・・・扉を開けたと思ったらカ
ンダ がいた・・・。何を言っているのかわからねえt(ry」

かくかくしかじか

「じゃ、そいつをぶつ倒せばいいんだな？単純明快じゃねえか！」

恐らく話を一割程度しか聞いてなかったであろう戦士が言う。

俺は四字熟語が珍しくあつてるのに驚きつつも頷く。

「それで、その人(?) はあの部屋にいるんですか？」

僧侶ちゃんが聞いてくる。

まあ一応問題は解決したし村に戻る。（帰りは迷わなかった）
すっかりあたりも暗くなっていた。もう今日は休もう・・・

「なんでみんなグー出すかなあ・・・」

翌朝、村長の爺さんのところに報告に行くと、

「ほっほっほ、おぬしならやってくれると思っと思ったわい」

とか余裕なこと言われた。

なんとなくイラッときたので、俺は爺さんの頭にモンゴリアンチョップを食らわせ、報酬と壺の中身を拝借して家を出る。

今日はこの村で一日休む予定なので、各自思い思いの過ごし方をしている。

ちなみに俺はジャンケンで負けたので村長への報告だ。

俺は特にすることも無いので、みんなの様子でも見に行こう。

道具屋や武具屋が並ぶところに行くと、僧侶ちゃんが薬草を選んでいた。

俺は後ろからそっと声をかけてみる。

「いつもありがとね、僧侶ちゃん」

「ひあぁっ!?!え、あ、勇者さん、驚かさないてくださいよ!」

どうやらおどかしてしまっただけなので、素直に謝る。

「それにしても珍しいですね、勇者さんも面白い物ですか?」

「いや、買い物は僧侶ちゃんに任せてるからね、いつもありがとう。」

基本的に俺たちの財布は僧侶ちゃんが握っている。
というか他の三人は稼ぐことはできても管理ができないのだ。

「あ、い、いえ、どういたしましてっ！」

俺がお礼を言うと、何故か赤くなる僧侶ちゃん。・・・そんな要素あつたか？

「じゃ、これ以上買い物の邪魔してもあれだし、もう行くね」

俺は手を振って立ち去る。

「あ、全然邪魔とかじゃ・・・」

僧侶ちゃんが何かゴニョゴニョ言っているような気がするが、おそろく気のせいだろう。

さて、一旦宿屋に戻るかな・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7715y/>

「なんか知らんが勇者に選ばれた」

2011年11月27日02時58分発行